熊朋来の古韻学（二）

富　平　美　波

1．はじめに

本稿は、前稿「熊朋来の古韻学（一）」（『アジアの歴史と文化　第三輯』1999.10　pp.63-92）に引き続き、元の熊朋来の著『熊氏経説』中に述べられている熊の古韻研究の内容と特徴を紹介しようとするものである。前稿では、同書巻二の「易詩書古韻」の条の内容を中心に検討したが、続く本稿では、その他の巻・条に見える言説から、熊の古韻に対する見解を追ってみたい。古韻については上掲「易詩書古韻」が唯一もっともまとまった記述をしている条であるので、本稿で扱うものはおのずと零砕な内容の寄せ集めになる恐れがあることを先にお断りしておかなければならない。

2．『詩経』の押韻（補遺）

『詩経』の各詩篇の押韻字とその読音についての熊の見解は、多く「易詩書古韻」の中に見えたが、そのほかにもいくつかの条に散見するものがある。また、「易詩書古韻」の条中でも、呉棫や鄭庠の韻部を批判する内容の段落以外の部分に現れるものは、前稿ではとりあげなかったので、ここで補っておきたい。前稿に引き続き、押韻例を掲げる際は、清朝小学の成果の一典型であるところの江有誥の『詩経韻読』・『群経韻読』（韻字と音注および韻部）と、熊に先行する研究として朱熹の『詩集伝』（韻字と音注）とを引用しながら示す。引用にあたって、江有誥の『詩経韻読』・『群経韻読』は（江）で、朱熹の『詩集伝』は（朱）で示す。また、熊朋来の採用する韻字や読音は（熊）で示す。

（1）巻一「襍卦錯簡」の条に見えるもの

同条に「正定二字在小雅皆協平声。」（「正」と「定」の２字は「小雅」においてはみな平声で調和している。）とある。『詩経』「小雅」の中で、「正」・「定」が平声字と押韻する箇所としては以下の３つが考えられる。

小雅189(1)斯干４章　（江）庭1(2)　楹2　正3：平声　冥4　寧5　耕部　（朱）正3：叶音征

小雅191節南山６章　（江）（天1）　定2：平声　生3　寧4　酲5　成6　政7：平声　姓8：平

声　耕部　合首句作真耕通韻亦可。真十二耕十三故得通用。　（朱）天1：叶鉄因反　定2：叶唐丁反　生3：叶桑経反　酲5：音呈　政7：叶諸盈反　姓8：叶桑経反

小雅191節南山９章　（江）平1　寧2　正4：平声　耕部　（朱）正4：叶諸盈反

上に見るとおり、朱熹の『詩集伝』もまた、これらの箇所の「正」・「定」を平声に読んでいる。また、熊より遅れる明の陳第の『毛詩古音考』も、これらの押韻例を「本証」として、「正」と「定」に平声の古音を推定している。

『毛詩古音考』巻二　「正　音征。……。然古悉此音、無有去声者。」　「本証」は、106「猗嗟」２章・189「斯干」５章・191「節南山」９章（心3入韻か。）・258「雲漢」８章

同巻三　「定　平声。」　「本証」は、191「節南山」６章と262「江漢」２章

陳第は『詩経』の中の異声調通押の現象を解くために、いくつかの韻字について今韻のそれと異なった声調の古音を想定しており、それとは別に、後世の曲韻のような、押韻技法としての異声調通押が、例外的に許容され得たと考えている。朱や熊も、『詩経』の時代、今韻と異なった声調の音によって押韻した韻字があったと考えているわけで、いずれ陳第のような考え方に発展する可能性を持った発想が、陳以前からあったことがわかる。

（２）巻二「易詩書古韻」の条に見えるもの

魯頌300閟宮２章　（江）王２　陽３　商４　陽部　／　武５　緒６　野８：音宇　（虞９：不入韻）　女10　旅11　父13　魯15　宇16　輔17　魚部　（朱）野８：叶上与反　女10：音汝　功12：叶居古　父13：扶雨反　子14：叶子古反　輔17：扶雨反　（熊）功12：功字四声功古故刮、魯頌協功之上声為古。

「功」字の音を「古」とすることにより、その他の中古遇摂の韻字との音の調和をはかろうとしているものである。上に見えるとおり、朱熹も同じ方法を採っている。これは、熊においては、韻母の韻尾のみが異なる所謂「相配」の韻の間で、後世言うところの「陰陽対転」に似た原理により、音が転じることがあるという考えに基づいていると思われる(3)。ただしここでは「功」字は上古東部(4)の字で、他の字は魚部であるから、上古音における（正）対転の韻部にはあたらない。

（3）巻二「皐陶明畏明威」の条に見えるもの

鄭風 76 将仲子１・２・３章　（江）懐 6：胡危反　畏 8：平声　脂部　（朱）懐 6：叶胡威反　畏 8：叶於非反　（熊）畏 8：将仲子東山詩韻皆以畏字作威。

豳風 156 東山２章　（江）畏 11：平声　懐 12：胡威反　脂部　（朱）畏 11：叶於非反　懐 12：叶胡威反　（熊）畏 11：同上。

この条はもともと『尚書』の文字遣いを論じた条で、「古字畏威通用。……。畏威合同音。」（古の文字遣いにおいては、「畏」字と「威」字は通用していた。……。「畏」字と「威」字は同じ音であった。）・「古人威畏同字、本非両音。」（古の人々にとって「威」字と「畏」字は同じ字で、もともと違った発音ではなかった。）と結論しているのに関連して、『詩経』の韻について述べているものである。もっとも、上に引いた２つの叙述からは、熊が「畏」と「威」がもともと（同源語であるかもしれないが、造字の時点では）２つの異なった語を表すために作られた独立の文字で、たんにしばしば通用するだけだと考えていたのか、元来違う文字で書かれる習慣の無かった同源の語が、後世截然と発音し分け書き分けられるようになったのだと考えていたのか、その点がやや曖昧である。

いずれにせよ、押韻という観点から見れば、「畏」字の声調を去声から平声に変えることにより、異声調間の押韻が解消されることになる。

これについて、呉棫の『韻補』も「畏」字に「於非切」の音をつけているが、根拠は熊と同じである。すなわち呉も、『尚書』の「畏」を『礼記』が「威」で引用している事実を示し、併せて『詩経』の「東山」の押韻例を取り上げている。

（4）巻七「評篆」の条に見えるもの。

小雅 171 南有嘉魚４章　（江）来 2：音吏　又 4：音異　之部　（朱）（雛 1：之誰反）　来 2：叶六直、陵之二反　（酒 3）　又 4：叶夷昔反、或如字　（熊）又 4：協夷益切

（朱の叶韻で、「来 2」を平声の音（「陵之反」：止摂平声之韻来母）にするのは、或いは「雛 1」（上古微部　中古止摂平声脂韻合口照母三等）と押韻しているとみなしたものか。また、「又 4」について「如字」とするのは、「酒 3」（上古幽部　中古流摂上声有韻精母）との押韻を考えたものかもしれない。但し声調は一致しない。或いは全章１韻で、「雛 1」・「来 2」・「思 4-4」（上古之部・中古止摂平声之韻心母）が押韻すると考えたものかもしれないが、句末の助字「思」が２句目では入韻せず、４句目では入韻していることになって、やや不自然である。）

小雅 220 賓之初筵 5 章　（江）否 2：方止反　史 4　恥 6　怠 8：徒里反　之部　／　語 10　殳 12　魚部　／　識 11：音志　又 12：音異　之部　（朱）否 2：叶補美反　怠 8：叶養里反　殳 12：音古　識 11：叶失、志二音　又 12：叶夷益、夷豉二反　（熊）又 12：協夷益切

2 例とも上古之部の押韻において、中古音で去声である「又」と入声字とが通押している現象を解くために、「又」に入声の音を認めたものと考えられる。但し、「賓之初筵」5 章の押韻相手字「識」には去声の音もあり（『広韻』「職吏切」：止摂去声志韻開口照母三等）、「南有嘉魚」4 章の押韻相手字は非入声字の「来」であるから、これら 2 例だけから「又」の音を入声とするのは無理がある。おそらく、その他の押韻例でも「又」が入声字と押韻する例があることや、「来」の音として入声音が想定されることとともに総合的な解釈がなされているのであろうと思われる。たとえば、「小雅」196「小宛」で「又」は「克」字と押韻している。また「来」字については、陳第『毛詩古音考』は「小雅」167「采薇」3 章ほか 6 つの押韻例を「本証」として「力」という音を推定しているが、それらの押韻例については朱の『詩集伝』も入声の叶音を付している。その 6 例のうち、「小雅」169「杕杜」4 章では（朱の解釈ではおそらく）「恤」（上古脂部中古臻摂入声術韻合口心母）と、203「大東」4 章では「服」と、大雅 242「霊台」1 章では「亟」と、263「常武」6 章では「塞」と押韻している。江有誥の『詩経韻読』はその多くを去声音による押韻と見なしているが、それでも「霊台」と「常武」の 2 例においては「来」字に「音力」と注している。

（5）巻七「評韻釈」の条に見えるもの

小雅 172 南山有台 4 章　（江）栲1：苦叟反　杻 2　寿 4：上声　茂 6：上声　幽部　（朱）栲 1：音考、叶音口　杻 2：女久反　寿 4：叶直酉反　茂 6：叶莫口反　（熊）茂 6：上声

大雅 258 雲漢 6 章　（江）去 2　故 4　莫 6　虞 8：去声　怒 10　魚部　（朱）莫 6：音慕　虞 8：叶元具反　（熊）虞 8：去声

大雅 256 抑 5 章　（江）度 2　虞 3：去声　魚部　／　儀 5：音俄　嘉 6：音歌　磨 8　為 10：音訛　歌部　（朱）虞 3：元具反　儀 5：叶牛何反　嘉 6：叶居何反　為 10：叶吾禾反　（熊）虞 3：去声

上の「茂」を上声に読む「南山有台」と、「虞」字を去声に読む「雲漢」・「抑」は、どちらも押韻に合わせて韻字の声調を変える例である。朱も後の江も同じ考え方をしていることがわかる。

以上（1）から（5）までを通じて顕著な点は、異声調間の押韻と見られる例を解消すべく韻

字の声調を変える例が多いことである。陰声韻の内部で声調を変えるものがその典型で、ほかに陽声から陰声へ、陰声から入声へという転換が同時に行われているものもある。「功」を音「古」とする例と「又」を「夷益切」に読む例がそれである。「又」と「夷益切」については、、これらの音が韻尾のみを異にして相対応する陰声韻と入声韻に所属すると認められているのかどうか、さだかではない。但し、直接には相対応しないと考えられているとしても、前稿でも見たように、熊は、上古之部の字が、中古音の止摂と流摂とに分属している現象にすでに気づいているから、流摂の音から、止摂の音に対応する入声としてよりふさわしいと思われる曽・梗摂の音へと転換することがあり得ると考えていた可能性はある。

（6）巻二「商頌」の条に見えるもの

「商頌」に属する5篇の詩篇について、その押韻の型を指摘し、それらが後世の詩の韻律に影響をあたえるところが大きかったことを論じた条である。条中の記述は、各詩篇が幾句ごとに押韻しているか、換韻がどうあるかなどを説明しているにとどまっている。ここでは、その記述を紹介するとともに、熊の見解では、各詩篇の韻字はそれぞれどれどれの字であるか推定できる場合は推定してみたい。

商頌301那1章　（江）猗1-1(5)：音阿、与那協。　那1-3(5)　歌部　／　鼓2　祖4　魚部　／　成6　声8　平9　声10　声12　耕部　／　斁 13：余入声　奕14：同上　客15：枯入声　懌16：余入声　昔17：胥入声　作18：租入声　夕19：徐入声　恪20：枯入声　魚部　／　嘗21　将22　陽部　（朱）淵7：叶於巾反　孫11：叶思倫反

熊の解説：「那之首章、隔句用韻、両韻一換、到綏我思成以下又毎句用韻、篇末別出嘗将二韻結之。」（「那」のはじめの章は、句をへだてて押韻しており、2韻押したところで換韻がおこり、6句目の「綏我思成」以下は句ごとに押韻している。そして、篇の末尾で別に「嘗」・「将」の2字が押韻して終わっている。）

この解説はかなり詳しいので、熊の韻字のとりかたがある程度推定できる。江や朱の見解も参考にして推測すると、ほぼ次のようではなかろうか。

（熊）鼓2　祖4　／　成6　淵7　声8　平9　声10　孫11　声12　／　斁 13　奕14　客15　懌16　昔17　作18　夕19　恪20　／　嘗21　将22

これに従えば、上古耕部の押韻の中に、「淵」（上古真部　中古山摂平声先韻合口心母）と「孫」（上古文部　中古臻摂平声魂韻心母）が混じっていることになる。朱の音注に従うと、これらの韻字の叶音（「於巾反」・「思倫反」）は-n 韻尾のままで、-ng 韻尾の梗摂細音の字との間で押韻が可能とみなされている。

商頌302烈祖1章　（江）祖1　祜2　所4　酤5　魚部　／　成6　平8　争10　耕部　／　疆

12　衡 13：音杭　鶬 14　享 15：平声　将 16　康 17　穰18　饗19：平声　疆 20　嘗 21　将 22　陽部　（朱）祜 2：候五反　酤 5：候五反　成 6：叶音常　羹 7：叶音郎　平 8：叶音旁　言 9：叶音昂　争 10：叶音章　衡 13：叶戸郎反　鶬 14：七羊反　享 15：叶虚良反　饗19：叶虚良反

熊の解説：「烈祖祖祜所酤四韻起、中間申錫無疆開下文連句之韻、似以三無疆為之節。後之人交互用韻始此。」（「烈祖」は、「祖」・「祜」・「所」・「酤」の４字の押韻から始まり、中間で３句目の「申錫無疆」が下の連句の韻を導き出している。そして、３句目と１２句目と２０句目に現れる３つの「無疆」の語がその一連の押韻に節を作っているようである。後の人々の交互に押韻する技法はここから始まったのだ。）

上の訳文には、筆者の判断で補ったところがある。すなわち、熊の判断では、３句目および６句目以下は篇末まで一連の押韻で換韻がないと見なしているとしたのである。すると熊はだいたい朱のような韻字を採っていると仮定でき、熊の考える押韻としてほぼ次のようなものが考えられる。

（熊）祖1　祜 2　所 4　酤 5　／　疆 3　成 6　羹 7　平 8　（言 9 ？）　争 10　疆 12　衡 13　鶬 14　享 15　将 16　康 17　穰18　饗19　疆 20　嘗 21　将 22

すなわち、上古陽部と耕部の字が、（熊がもし朱のような音を想定しているとすれば、いずれもが宕摂の音でもって）一連の押韻を形作ることになり、もし熊が朱と同じように「言」（上古元部　中古山摂平声元韻開口疑母）も押韻に入れているとすれば韻字の範囲は更に広いことになる。

商頌 303 玄鳥１章　（江）商 2　芒3　湯4　方5　陽部　／　有7：音以　殆9：徒里反　子10　之部　／　勝12　乗13：平声　承14　蒸部　／　里15　止16　海17：音喜　之部　／　祁19：叶渠何反、俗本作祈誤。　河20　宜21：音俄　何22：平声　歌脂合韻　歌弟六脂弟八故得合用。　（朱）有7：叶羽己反　殆9：叶養里反　子10：叶奨履反　勝12：音升　乗13：縄證反　海17：叶虎洧反　（假：音格、下同。）　宜 21：叶牛何反　何 22：音荷、叶如字。

熊の解説：「商頌多毎句用韻、玄鳥長発殷武皆然。」（「商頌」には毎句押韻しているものが多い。「玄鳥」・「長発」・「殷武」の３篇はみなそうである。）・「玄鳥五換韻。【割注：邦畿千里之上疑有逸句。来假祁祁之祁当協伽。】」（「玄鳥」は５回韻を換えている。【１５句目の「邦畿千里」の上には失われた句があるように思う。１９句目の「来假祁祁」の「祁」の字は「伽」の音で韻が調和していると見るべきである。】）

熊の解説では、毎句押韻があるとしているが、江らの韻字を見た限りでは完全にそうであるとも言えない。ただし、彼らが韻に入れていない「后6」・「后8」、「子11」、「假18」が押韻に参加しているとみなされている可能性がないわけではない。すると、首句の「鳥」字を除いて毎句押韻があることになる。だが、熊に先立つ宋の呉棫の『韻補』は「有」字に「羽軌切」の音を想定しており（巻三）、明・陳第の『毛詩古音考』は「有」の古音について「音以。凡詩皆此音。……。」

と述べている（巻一）。『詩集伝』も同様の立場であるのは上記のとおりであり、熊も彼らにならって、「有7」と「殆9」・「子10」（・「子11」？）との押韻を認め、「后6」・「后8」（上古音侯部）は韻字に入れていない可能性がある。それに「后 6」・「有 7」・「后 8」が流摂の音で押韻しているなら、全体で6換韻となる。

商頌304長発1章　（江）商1　祥2　芒3　方4　疆5　長6　将7　商8　陽部　（朱）（押韻にかかわる音注は特になし。）

商頌304長発2章　（江）撥1：音鼈　達2：他折反　達3　越4　発5　烈6　截7　祭部　（朱）撥1：叶必烈反　達2：叶他悦反　発5：叶方月反

商頌304長発3章　（江）違1　斉2　遅3　躋4　遅5　祇6　囲7　脂部　（朱）（押韻にかかわる音注は特になし。）

商頌304長発4章　（江）球1-3　球1-5　旒2　休3　絿4　柔5　優6　遒7　幽部　（朱）球1-3：音求　旒2：音流　絿4：音求　遒7：子由反

商頌304長発5章　（江）共1-3　共1-5　厖2　竜3　勇4　動5　竦6　総7　東部　（朱）共1-3：音恭、叶居勇反　厖2：莫邦反、叶莫孔反　竜3：叶丑勇反　動5：叶徳総反　竦6：小勇反　総7：子孔反

商頌304長発6章　（江）旆1：丕吠反　鉞2　烈3　曷4：胡折反　蘖5　達6：他折反　截7　伐8：吠入声　桀9　祭部　（朱）鉞2：音越　曷4：漢書作遏、阿葛反、叶阿竭反　蘖5：五葛反、叶五竭反　達6：叶陀悦反　伐8：叶房越反

商頌304長発7章　（江）葉1　業2　葉部　／　子3　士4　之部　／　衡5：音杭　王6　陽部　（朱）子3：叶奨履反　士4：鉏里反　衡5：叶戸郎反

熊の解説：「商頌多毎句用韻、玄鳥・長発・殷武皆然。」（「商頌」には毎句押韻しているものが多い。「玄鳥」・「長発」・「殷武」の3篇はみなそうである。）・「長発前六章皆毎句有韻、惟卒章両韻一換。」（「長発」の前6章はみな句ごとに韻を踏んでいる。ただ最後の章だけが2韻ごとに換韻している。）

熊の解説からみて、熊が上の江と同様の韻字の取り方をしていることは明らかである。朱の音注にも特に問題はなく、同様の立場であると思われる。

商頌305殷武1章　（江）武1　楚2　阻3　旅4　所5　緒6　魚部　（朱）緒6：象呂反

商頌305殷武2章　（江）鄉2　湯3　羌4　享5：平声　王6　常7　陽部　（朱）享5：叶虚良反

商頌305殷武3章　（江）辟1　績2　辟3　適4：如字　解5：音擊　支部　（朱）辟1：音璧　適4：直革反　解5：音懈、叶訖力反

商頌305殷武4章　（江）監1：音剣、与濫協。濫3：音殮　談部　／　厳2：当作荘、説見総

論。　遑4　陽部　／　国5：古逼反　福6：方逼反　之部　（朱）監1：下与濫叶。　厳2：叶五剛反　国5：叶越逼反　福6：叶筆力反

商頌305殷武5章　（江）翼1　極2　之部　／　声3　霊4　寧5　生6　耕部　（朱）生6：叶桑経反

商頌305殷武6章　（江）山1：音仙　丸2：音懸　遷3　虔4　梴5　閑6：胡連反　安7：音蔫　元部　（朱）山1：叶所旃反　丸2：叶胡員反　梴5：丑連反　閑6：叶胡田反　安7：叶於連反

熊の解説：「商頌多毎句用韻、玄鳥・長発・殷武皆然。」（「商頌」には毎句押韻しているものが多い。「玄鳥」・「長発」・「殷武」の3篇はみなそうである。）・「殷武毎句用韻、惟第四章交互用韻、其末別出国福二韻結之。五章以翼極二韻起、而下文連句有韻。卒章又全章連句用韻。」（「殷武」は句ごとに押韻しているが、第4章だけは交互に押韻し、最後に別に「国」・「福」の2字を押韻させて結びとしている。第5章は「翼」・「極」の2韻で始まり、その後は句ごとに一連の押韻である。最後の章は再び全章をつうじた1句ごとの押韻にもどる。）

この解説からみるところ、熊の考えも江・朱らの韻字の取り方と差がないことがわかる。

この条の最後の割り注の部分で、さらに「交互用韻之例」（交互に押韻している例）として、「皇皇者華」首章が挙げられている。

小雅163皇皇者華1章　（江）華1：音孚、与夫協。　夫3　魚部　／　隰2　及4　緝部　（朱）華1：芳無反、与夫叶。

熊の韻字の取り方も朱・江らと同じであることがわかる。

3．『易経』の押韻（補遺）

巻一「読易荅問」に次の押韻例が取り上げられている。

下経「漸」九三　（江）陸　復　育　幽部　（熊）陸　復　育

下経「漸」上九(6)　（江）陸：折中謂当作阿　儀：音俄　歌部　（熊）逵：求呿切　儀：牛何切

熊の議論の中心は下の上九の韻にある。本田済氏『中国古典選2　易（下）』や鈴木由次郎氏

『全釈漢文体系１０　易経　下』によると、上九の爻辞「鴻漸于陸」の「陸」を「逵」に改めたのは宋の胡瑗である(7)。胡は字形の類似と前後の文脈からそう判断したのであるが(8)、程頤がこの説を採り(9)、さらに朱熹もそれを正しいとして「逵」と「儀」で韻が合うと述べた(10)。朱がこの押韻を考える際、両字にどんな音を想定していたのかはわからない。だがかりに中古音によっても「儀」は支韻、「逵」は脂韻でともに止摂の音だから韻は合う。しかし熊は、そのような見方に対して「儀字在詩韻中無魚畸切。」（しかし「儀」字には『詩経』の韻の中では「魚畸切」の音はないはずだ。）という反論を設定する。このことから、熊の当時すでに、「儀」字は『詩経』の押韻を基準とするならば、止摂の音ではありえない、ということがおおかたの知識になっていたことがわかる。「爻辞には必ず押韻がある」（「爻辞必協韻。」）とする熊の解決法は、「逵」に「求呿切」、すなわち中古音でいうと戈韻（韻図では開口３等）の音を想定するというものである。しかし、「逵」字は上古幽部から中古脂韻に入った特殊な字で、歌部の「儀」字との押韻には無理がある。げんにこの後顧炎武が『日知録』（巻一）や「易本音」（巻一）において「儀」の古音は「牛何切」（「易本音」では「音俄」）だから「逵」とは押韻できないと批判し、江永も同様のことを述べて、「陸」は「阿」の誤りであるとした(11)。ここでは熊は、まさに「儀」字のように、中古止摂で果摂の古音を推定される字があることから、脂韻の「逵」字にも同じような音の転換が可能であると考えたのであろうか。

４．『書経』の押韻

『書経』の中の韻文の押韻について、巻二「易詩書古韻」の条で、いくつかの押韻例が論じられている。熊の考えによれば、『書経』や『易経』の押韻は、『詩経』の押韻とともに、古人の字音の正しい姿を知るための資料であり、互いに裏付け合わせることができる（同条。前稿参照。）。ここでとりあげる『書経』の押韻は、それを説明するために提出されたものである。以下、『尚書』の篇ごとに分けて掲げる。

益稷「乃歌曰」　（江）喜　起　熙：上声　之部　（熊）喜　起　熙：上声
益稷「颺言曰」　（江）無韻　（熊）無韻
益稷「賡載歌曰」　（江）明　良　康　陽部　（熊）明：彌良切　良　康
益稷「又歌曰」　（江）脞：上声　惰　堕　歌部　（熊）脞　惰：上声　堕：上声（「惰堕本皆上声」）

熊の韻字の取り方は江と変わりがない。「熙」字については押韻に合うように声調を改めている。また熊は、「明」字が古韻では中古宕摂の字と押韻することに気づいている。

大禹謨「帝徳広運」以下　（江）運：平声　神　文　命：平声　君　文真通韻　（熊）運：平声　神　文　君

大禹謨「汝惟不矜」以下　（江）無韻　（熊）伐　功：協功之入声為刮

大禹謨「天之歴数在汝躬」以下　（江）危　微　脂部　／　中　庸　東中通韻　／　君　民　文真通韻　／　衆：平声　邦　東中通韻　／　位：叶音院　願　脂元合韻　／　窮　終　戎　中部　（熊）危　微　／　躬：音肱　君　民　／　中　庸　邦　窮　終　戎

熊はここでも「運」字の声調を押韻相手字に合わせている。また、「功」字（東部）の音を「音刮」として「伐」字（月部）と押韻させている。この読音は、熊によれば、次のように説明される。「功字四声功古故刮、魯頌協功之上声為古、虞書協功之入声為刮、故功伐可為韻也。」（「功」字の字音を四声に展開させると「功古故刮」となる。「魯頌」では「功」の上声に調和して「古」の音になり、「虞書」では「功」の入声に調和して「刮」の音になっているのである。従って「功」と「伐」とは押韻が可能である。）つまり、ここでは、「功」字の音を四声に展開させると「功古故刮」になることから、「功」音からその入声に転じたに過ぎないということである。そして、上声（音「古」）に転じて音が調和している押韻例が、本稿２の（２）で取り上げた魯頌300閟宮２章の例であって、そこでは「功」は「野」ほか魚部の字と押韻しているとみなされている。しかし、上の「功古故刮」という字音の対応を見た場合、陽声通摂東韻一等の音（「功」）が陰声遇摂模韻の音（「古」・「故」）と対応するのは理解しやすいが、それらをつなぐ入声が山摂鎬韻合口の音（「刮」）だというのは、方言か、或いは押韻を合わせるための措置であるなど、なんらかの理由が介在していることが予想される。

この「功」の音を「刮」として「伐」と押韻しているとみなすやり方については、清の周春『十三経音略』が批判的な意見を述べている。同書の巻二「書経」の「書韻」の条で、周はさかんに熊を引用しているが、ここの韻に関しては、

「叶音肱、矜能功為韻。熊氏朋来以伐与功為韻、引魯頌克咸厥功為例、四声通転、其説非是。毛西河已辨之。」（[功字は] 叶音「肱」[中古曽摂平声登韻合口見母：筆者注、以下同。] で、「矜」[上古真部　中古臻摂平声真韻開口群母三等・曽摂平声蒸韻開口見母]・「能」[上古之部　中古蟹摂平声咍韻泥母・曽摂平声登韻開口泥母]・「功」が韻を踏んでいる。熊朋来氏は「伐」と「功」とが押韻するのだとみなして、「魯頌」の「克咸厥功」を例にとって、四声が通転するのだと説明しているが、この説は正しくない。このことは毛西河氏がすでに論じている。）

と述べている。従って、同じような反対意見を持つ人としては、周よりも前にすでに毛西河（毛奇齢）がいたことになるが、周が指しているのはおそらく毛の『古今通韻』巻一の次のような叙述であろう。

「宋儒論四声通転竟及入声、与詞曲同。故宋人不復著詞曲韻、正以此耳。但其説多謬。如魯頌敦

商之旅、克咸厥功、以功読古、此是叶音。虞書汝惟不矜、天下莫与汝争能、汝惟不伐、天下莫与汝争功、以功協能、此是転音、正東冬転蒸之證、而宋儒読功作刮、与伐相協、謂功古故刮、四声通転、且引克咸厥功、功字読古為證。殊不知功之読古、只是叶読、原非通転。功在東韻、古在麌韻、無此転法。若又転刮、刮在黠韻、愈転愈遠。天下無東平与虞之上声寒之入声作転合者、而以為通転、是茫然不識四声為何物、而欲以定韻、豈不冤乎。況詩易楚詞及六朝唐詩亦無入声通転者耶。」(宋の学者は通転を論じてついに入声にまで通じさせてしまい、詞曲と同じになってしまった。だから宋の人々がもはや詞曲の韻を著そうとしなかったのはまさにその理由によるのである。しかしかれらの説は多く誤っている。たとえば、「魯頌」の「敦商之旅、克咸厥功」について、「功」を「古」と読むのはこれは叶音である。「虞書」の「汝惟不矜、天下莫与汝争能、汝惟不伐、天下莫与汝争功」について、「功」を「能」に調和させるのが、これが転音であって、まさしく東・冬韻が蒸韻に転じるよい例証であるのに、宋の学者は「功」を「刮」と読み、「伐」と調和させ、「功古故刮」で四声の通転であると言い、「克咸厥功」を引いて、「功」字が「古」と読まれる証拠としている。しかしながら、「功」が「古」と読まれるのはたんなる叶読であって、元来通転ではない。「功」は東韻に、「古」は麌韻にあって、このような通転はありえない。もし、さらに「刮」に転じるというのなら、「刮」は黠韻だから、ますます遠くなる。世の中に東韻の平声と虞韻の上声・寒韻の入声が通転して合うなどということはないのに、これを通転だとするのは、まったく四声の何物たるかを知らないものである。そんな知識で韻を定められてはかなわないではないか。ましてや、『詩経』・『易経』『楚辞』から六朝や唐の詩に至るまで入声の通転というものは見られないのである。)

この記述によると、ここの「功」の音を「刮」とするのは熊の前にすでに「宋儒」がいることになるが、それが誰の説までさかのぼるのか、筆者はまだ明らかにできていない。

五子之歌「其一」　(江) 下　予：上声　図：上声　馬　魚部　(熊) 下：音虎　婦　予：上声　図：上声　馬：音姥

五子之歌「其二」　(江) 荒　荒　牆　亡　陽部　(熊) 荒　荒　音：協央　牆　亡

五子之歌「其三」　(江) 唐　方　綱　亡　陽部　(熊) 唐　方　綱　亡

五子之歌「其四」　(江) 君　孫　文部　／　有：音以　祀　之部　(熊) 君　孫　／　有(12)：音以　祀

五子之歌「其五」　(江) 帰　悲　依　怩　追　脂部　(熊) 帰　悲　依　怩　追

「五子之歌」の押韻について熊の見解はほぼ江と変わりないが、「其一」について、之部の「婦」字をよけいに押韻に入れている。「婦」は上古之部から中有尤韻に入った字であるが、ここでの押韻相手字から見ると、熊は、それが更に遇摂の諸字と合流した後の音によって、押韻を解釈しているようでもある。或いは、巻二「易詩書古韻」の第4段落で述べているように、熊は、古韻

において遇摂の字と流摂の字が通韻する事実がある（上古侯部）ことに気づいているから、それから類推してこう判断したのかもしれない。また、「其二」については、-m 韻尾の「音」字が音「央」で上古陽部・中古宕説の諸字と押韻することがあると考えている。

仲虺之誥　（江）良　亡　昌　陽部　（熊）慶：音羌　商　良　亡　昌

「商」・「慶」ともに陽部の字だから、他の韻字と一連の押韻に含まれてもおかしくはない。江は位置的関係から、これらを韻に含めなかったのではあるまいか。熊は、「易詩書古韻」の第8段落で述べているように、呉棫や陳第と同じく古韻において「慶」字に「羌」の音があることに気づいている。

伊訓　（江）洋　彰　常　祥　殃　慶　宗：叶音臧　陽中合韻　（熊）洋　彰　常　祥　殃　慶：音羌　宗：荘而承盛也

「宗」字については、意味的関連から「荘」の音を想定しているのであろう。江のように、ここが「合韻」であるというような意識はなかったかもしれないが、結果的に江と同じような解決にたどりついているわけである。

説命上　（江）正　聖　聖　命　耕部　（熊）正　聖　聖　承　命

熊が押韻に「承」字を含めたのは、中古の曽摂と梗摂の音を近いと考えているからであろうが、後の目から見れば、蒸部の字である「承」字が1つだけ耕部の押韻の中に混じっているという結果になってしまっている。

このほか、熊は「禹貢」篇について、「禹貢九州時出韻語。」（「禹貢」篇の「九州」について述べた部分には時として韻を踏んだ文が出ている。）と述べているが、江によれば、「禹貢」篇の押韻は次の2部分だけである。

禹貢　（江）従　同　東部

旅　鼠　野：音宇　叙　魚部

また、「洪範」篇については、「洪範用韻処尤為易見。」（「洪範」篇の押韻している箇所はとりわけ目につきやすい。）と述べているが、江を見ても、この篇は多数の押韻がある。

5．『易経』と『書経』の錯簡

熊は、『熊氏経説』の巻一「襍卦錯簡」の条と、巻二の「五紀以後錯簡須別録出方可読」と題する条とで、『周易』の「雑卦伝」と『尚書』の「洪範」篇とに、大幅な錯簡があるという意見を述べている。ここでは、そのうち押韻と関わる部分のみを検討してみたいと思う。

（1）雑卦伝

下に見えるように、熊の考える伝の本文は、通行本の代表としての『十三経注疏』本と比較してみると、最後の数句が入れ替わっているだけで、前半部分には大幅な違いは見られないが、念のため、『十三経注疏』本の「雑卦伝」の本文を全文掲げることとする。各句には通し番号を付ける(13)。そして、江有誥（『群経韻読』）が押韻字と認めている字にはかっこを付し、江が韻字に付けている音注と韻部の表示を加えておく。換韻のある部分には斜線（／）を付して示す。換韻の表示は便宜上前の押韻の最後の韻字のある句の後ろに入れる。

「1 乾剛、2 坤（柔）、3 比楽、4 師（憂）、5 臨観之義、6 或与或（求　幽部）、／　7 屯見而不失其（居：去声）、8 蒙雑而（著　魚部）、9震（起）也、10艮（止）也、11損益盛衰之（始）也、」　12大畜（時）也、13无妄（災）也、14萃聚、15而升不（来）也、」　16謙軽、17而豫（怠：徒其反）也、」　18噬嗑（食）也、19 賁无（色：史入声）也、20兌見、21而巽（伏：房逼反）也、22随無故也、23蠱則（飭　之部）也、／　24剥（爛：音練）也、25復（反：去声　元部）也、／　26晋（晝）也、27明夷（誅：音咮）也、28井通、29而困相（遇：音余晝反　侯部）也、／　30咸速也、31恒（久：音己）也、32渙離也、33節（止　之部）也、／　34解（緩：胡卷反）也、35蹇（難：奴唁反　元部）也、／　36睽外也、37 家人（内）也、38 否泰反其（類）也、39 大壮則止、40 遯則（退　脂部）也、／　41大有衆也、42同人（親）也、43革去故也、44鼎取（新）也、45小過過也、46中孚（信：平声　真部）也、／　47豊多（故：上声）也、48親（寡：音古、当作旅親寡也）旅也、49離上而坎（下）也、50小畜（寡）也、51履不（処　魚部）也、／　52需不（進：平声）也、53訟不（親）也、54大過（顛：徳因反　真部）也、／　55姤遇也、56 柔遇（剛）也、57 漸女帰待男（行　陽部）也、／　58頤養（正）也、59既済（定　耕部）也、／　60帰妹女之（終）也、61未済男之（窮　中部）也、／　62夬決也、63剛決（柔）也、64君子道長、65小人道（憂　幽部）也」

次に熊のよしとする本文を掲げ、熊が押韻字であるとみなしているらしい文字にはかっこを付して示す。また、『十三経注疏』本と句の順番に出入りがある箇所にはとじかっこ「】」を入れておく。句の番号は上と同じである。

「1 乾剛、2 坤（柔）、3 比楽、4 師（憂）、5 臨観之義、6 或与或（求）、7 屯見而不失其（居）、8 蒙襍而（著）、9震（起）也、10艮（止）也、11損益盛衰之（始）也、12大畜（時）也、13无妄（災）也、14萃聚、15而升不（来）也、16謙軽、17而豫（怠）也、18噬嗑（食）也、19 賁無（色）也、20兌見、21而巽（伏）也、22随無故也、23蠱則（飾）也、24剥（爛）也、25復（反）也、26晋（晝）也、27明夷（誅）也、28井通、29而困相（遇）也、／ 30咸速也、31恒（久）也、32渙（離）也、33節（止）也、34解（緩）也、35蹇（難）也、36睽（外）也、37 家人（内）也、38 否泰反其（類）也、39 大壮則止、40 遯則（退）也、41大有衆也、42同人（親）也、43革去（故）也、44鼎取（新）也、45小過（過）也、46中孚（信）也、47豊多（故）也、48親寡（旅）也、49離上而坎（下）也、50小畜（寡）也、51履不（処）也、52需不（進）也、53訟不（親）也、54大過（顛）也、 】 58頤養（正）也、59既済（定）也 】 61未済男之（窮）也、 】 60帰妹女之（終）也、 】 57漸女帰待男（行）也、 】 55姤遇也、56 柔遇（剛）也、 】 62 夬決也、63剛決（柔）也、64君子道長、65小人道（憂）也」

次に、熊の考える押韻の状況を、韻字とそれに付されている熊の音注によって示す。斜線が入っているのは、換韻があると見られる箇所である。

柔 2　憂 4　求 6　／　居 7：協据　著 8　／　起 9　止 10　始 11　時 12：協是　災 13：協滓　／　来 15：協厘去声　怠 17：協棣、京氏怠字(14)作治(15)、於韻亦正協　／　食 18　色 19　伏 21：協闢　飾23：或作飭　／　爛 24　反 25　／　晝26　誅27：協咮、晝遇二韻皆通　遇29　／　久31：協已(16)　離32：去声　止33　／　緩34　難35：去声　／　外 36　内 37　類 38：協耒　退 40　／　親 42　新 44　信 46：音申　／　故 43　遇 45：故遇(17)、新信互韻　／　故 47：協古　旅 48　下 49：協虎　寡 50：協古　処 51　／　進 52：協津　親 53　顛54：滴音切　正58：協貞［真］(18)　定59：協汀　／　窮61：協強　終60：協章　行57：協杭　剛56　／　柔63　憂65：韻始於柔憂、終於柔憂。

（熊の記述からは、「爛 24　反 25」が韻字とみなされているかどうか不明であるが、字音から判断してとりあえず上記のように見なしておいた。）

熊がこの条の初めに述べているところによると、この「雑卦伝」は、全体が反対の卦を対にして並べ、かつ韻の上でも十分に調和するという体裁になっているのだが、「55姤遇也」以下がその体裁を乱している。そして、「後儒多以意改定、或違対卦之例、或失古韻之音、於内僅蔡氏所改定者為可通。」（後の学者がいろいろと自分の意見で改定しているが、それらはあるものは卦を対にしてならべるという体裁に違反しているし、あるものは古韻の音にかなっていない。中で蔡氏の改定したものだけが適当なようである。）と、「蔡氏」の改定案を採用したことを明らかにしている。この「蔡氏」とは、宋の蔡淵を指していると考えられる。本田済氏『中国古典選 2　易

（下）』（p.382）・鈴木由次郎氏『全釈漢文体系１０　易経下』（p.498-500）によると、早い時期のものとしては鄭玄が「雑卦伝」に錯乱があるようだと言っており(19)、宋の蘇軾は独自の改訂案を示したが蔡淵のものとは違っている(20)。蔡淵は『周易経伝訓解』で自身の改訂案を示し、それによれば卦が対になり韻も調和すると述べた(21)。この後、宋の丘富国(22)が本文の改訂には慎重ながら蔡の案で押韻が合うことを認め、また元の呉澄(23)や明の何楷(24)も、蔡の改訂案を採用して、それによって押韻上も問題がないと見なした。但し、朱熹は錯簡があるかどうか結論を保留し、原文のままでも韻は合わせられると述べている(25)。ここでの熊の改訂案は蔡のものに一致している。

熊は、最初から「訟不親也」までの部分については特に韻字を明示しておらず、どこに換韻があるのかについても言及していないので、上記の韻字と換韻（／）の表示は、熊の音注を参考にして筆者が推定したものだが、「顛：滴音切」以下は明瞭な叙述があるのでその部分の押韻が上記のようであることはほぼ明らかである。そしてそれらの部分は、錯簡の推定、すなわち本文の句の入れ替えと押韻の推定とが明らかに関連している。しかしその結果は、江有誥が指摘するところの、「進　親　顛　真部　／　剛　行　陽部　／　正　定　耕部　／　終　窮　中部」という押韻の枠が乱され、-n韻尾の「進」・「親」・「顛」（「顛」字の音注「滴音切」は中古-m韻尾である。）と-ng韻尾の「正」（音注「真」は中古-n韻尾）・「定」が押韻していることになり、かつ、上古中部で中古音でも東韻所属の「終」・「窮」が宕摂陽韻の音を付けられて陽部の「剛」・「行」と押韻させられている。変換によってむしろ無理が出ていると言うことができる。このあたりについて、先に挙げた呉澄の『易纂言』は「雑卦伝」の各段落にいくつの換韻があるかを明示しているのだが、第５２句以下については「十四句五韻」と言っているから、おそらく「進52　親53　顛54　／　正58　定59　／　窮61　終60　／　行57　剛56　／　柔63　憂65」であろうと思われ、熊よりはるかに妥当である。第９から１７句にかけての部分も、呉によれば「起9　止10　始11」で１韻、「時12　災13　来15　怠17」で１韻で、呉は熊ほど韻字の声調を変えていない。また、江有誥が韻字とせず、熊が韻字としているものに、「離32」と「外36」があるが、「離」は中古止摂支韻・上古歌部の字であるから、周辺の、同じく止摂の字ではあるが上古之部に所属する韻字とは韻部が合わない。また、「外」は中古蟹摂泰韻・上古祭部であって、周辺の脂部の韻字とは韻部が合わない。熊は、蟹摂一等合口の「外」・「内」・「退」に合わせて止摂合口字の「類」字の音を「音耒（蟹摂一等隊韻）」とすることで音を調和させようとしている。

（２）「洪範」

条の題目が「五紀以後錯簡須別録出方可読」であるように、『尚書』「洪範」篇の「四、五紀、一曰歳」以下の部分の句の順序を検討し、併せて押韻を論じるのが、熊の眼目である。『十三経注疏』本などと比較すると、かなり大胆な句の順序の組み替えが見られるが、熊当時のなんらかの版本や『尚書』学の動向と関係があるのか、熊の学問の背景については、筆者にはなお未詳で

ある。ここでは、とりあえず、熊の考えるこの篇の本文と『十三経注疏』本のそれとを照らし合わせ、それが押韻の状況にどんな影響を及ぼしているかを確認してみたい。ただし、当該部分のうち「七、稽疑」から「恒風若」までの部分は、句の順序に入れ替えがなく、かつ押韻とも無関係であるので、本文は掲げないこととする。まず、『十三経注疏』本の本文を、句ごとに番号をつけて(26)下記に引用する。かっこに入れた文字は、江有誥（『群経韻読』）が韻字と認めている文字である。（1）と同じように江の音注と韻部の表示も加え、換韻の所には斜線（／）を付す。

「1四、2五紀、3一曰歳、4二曰月、5三曰日、6四曰星辰、7五曰厤数、8五、9皇（極）、10皇建其有（極）、11斂時五（福）、12用敷錫厥庶民、13惟時厥庶民、14于汝（極）、15錫汝保（極）、16凡厥庶民、17無有淫朋、18人無有比（徳）、19惟皇作（極　之部）、／　20凡厥庶民、21有猷有為有（守）、22汝則念之、23不協于極、24不罹于（咎）、25皇則（受　幽部）之、／　26而康而（色）、27曰予攸好（徳）、28汝則錫之（福）、29時人斯其惟皇之（極　之部）、／　30無虐煢独、31而畏高（明）、32人之有能有為、33使羞其（行）、34而邦其（昌　陽部）、／　35凡厥正人、36既富方穀、37汝弗能使有好于而（家：音姑）、38時人斯其（辜　魚部）、／　39于其無好（徳）、40汝雖錫之（福）、41其作汝用（咎：叶音極　之幽通韻）、／　42無偏無（陂：平声）、43遵王之（義　歌部）、／　44無有作（好：呼叟反）、45遵王之（道　幽部）、／　46無有作（悪）、47遵王之（路　魚部）、／　48無偏無（党）、49王道蕩（蕩　陽部）、／　50無党無（偏：音縯）、51王道平（平：如字　真耕通韻）、／　52無反無（側：菑入声）、53王道正（直）、54会其有（極）、55帰其有（極　之部）、／　56曰、57皇極之敷言、58是彝是（訓）、59于帝其（訓　文部）、／　60凡厥庶民、61極之敷言、62是訓是（行）、63以近天子之（光）、64曰、65天子作民父母、66以為天下（王　陽部）、／　67六、68三（徳）、69一曰正（直）、70二曰剛（克）、71三曰柔（克）、72平康正（直）、73彊弗友剛（克）、74燮友柔（克）、75沈潛剛（克）、76高明柔（克）、77惟辟作（福）、78惟辟作威、79惟辟玉（食）、80臣無有作福作威玉（食）、81臣之有作福作威玉（食）、82其害于而家、83凶于而（国）、84人用側頗僻、85民用僭（忒　之部）

（「七、稽疑」～「恒風若」略）

86曰、87王省惟歳、88卿士惟月、89師尹惟日、90歳月日時無易、91百穀用（成）、92乂用（明）、93俊民用（章）、94家用平（康　陽部）、／　95日月歳時既易、96百穀用不（成）、97乂用昏不（明：叶音鳴）、98俊民用微、99家用不（寧　耕陽通韻）、／　100庶民惟星、101星有好風、102星有好（雨）、103日月之行、104則有冬有（夏：音戸）、105月之従星、106則以風（雨　魚部）、107九、108五福、109一曰寿、110二曰富、111三曰康寧、112四曰攸好徳、113五曰考終命、114六極、115一曰凶短折、116二曰疾、117三曰憂、118四曰貧、119五曰悪、200六曰弱」

次に熊の考える本文を引用する。熊が韻字であるとみなしていることがほぼはっきりしている文字は、かっこにいれて示す。句についている番号は、上の『十三経注疏』本の引用につけた番

号と同じである。句の入れ替えが行われている部分にはとじかっこ「】」を入れる。熊は、全体を3段落に分けて示している。第2段落には、押韻についての記載はない。

1「1四、2五紀、3一曰歳、4二曰月、5三曰日、6四曰星辰、7五曰歴数、 】 86曰、87王省惟歳、88卿士惟月、89師尹惟日、90歳月日時無易、91百穀用成、92乂用明、93俊民用章、94家用平康、95日月歳時既易、96百穀用不成、97乂用昏不明、98俊民用微、99家用不寧、100庶民惟星、101星有好風、102星有好（雨）、103日月之行、104則有冬有（夏）、105月之従星、106則以風（雨）、 】 8五、9皇（極）、10皇建其有（極）、 】 13惟時厥庶民、14于汝（極）、15錫汝保（極）、16凡厥庶民、17無有淫朋、18人無有比（徳）、19惟皇作（極）、20凡厥庶民、21有猷有為有（守）、22汝則念之、23不協于極、24不罹于（咎）、25皇則（受）之、 】 32人之有能有為、33使羞其（行）、34而邦其（昌）、 】 30無虐煢独、31而畏高（明）、 】 29時人斯其惟皇之極、 】 56曰、57皇極之敷言、58是彝是訓、 】 62是行(27)、63以近天子之（光）(28)、64曰、65天子作民父母、66以為天下（王）、 】 42無偏無（陂）、43遵王之（義）、44無有作（好）、45遵王之（道）、46無有作（悪）、47遵王之（路）、48無偏無（党）、49王道蕩（蕩）、50無党無（偏）、51王道平（平）、52無反無（側）、53王道正（直）、54会其有（極）、55帰其有（極）」

2「67六、68三徳、69一曰正直、70二曰剛克、71三曰柔克、72平康正直、73彊弗友剛克、74燮友柔克、75沈潜剛克、76高明柔克、】 （このあとは「八、庶徴」から「恒風若」までの経文が続く。「七、稽疑」から「用作凶」までは経文から省かれている。なお、熊はこの箇所の押韻には言及していない。）

3「107九、108五福、109一曰寿、110二曰富、111三曰康寧、112四曰攸好徳、113五曰考終命、 】 11斂時五福、 12用敷錫厥庶民、 】 35凡厥正人、36既富方（穀）、 】 26而康而（色）、 】 37汝弗能使有好於而（家）、38時人斯惟（辜）、 】 27曰予攸好（徳）、28汝則錫之（福）、 】 39予其無好（徳）、40汝雖錫之（福）、41其作汝用（咎）、 】 114六極、115一曰凶短折、116二曰疾、117三曰憂、118四曰貧、119五曰悪、200六曰弱、 】 77惟辟作（福）、78惟辟作（威）、79惟辟玉（食）、80臣無有作福作威玉（食）、 81臣之有作福作威玉（食）、82其害于而家、83凶于而（国）、84人用側頗僻、85民用僭（忒）」

次に、熊の考える押韻の状況を、韻字とそれに付されている熊の音注によって示す。斜線が入っているのは、換韻があると見られる箇所である。

1（「四五紀」より「星有好風」まで韻字不明）

雨102　夏104：協虎　雨106　／　極9　極10　極14　極15　徳18　極19　／　守21

咎 24　受 25　／　行 33：協杭　昌 34　明 31：協芒　行62　光63　王66　／　陂42　義43　／　好44　道45　／　悪46　路47　／　党48　蕩49　／　偏50　平51　／　側52　直53　極54　極55

（熊の記述からは、「好」・「道」以下の部分の韻字が明らかではないが、42「無偏無陂」から最後までに6回換韻があると言っているから、おそらく上記のようであろうと思われる。）

3（冒頭部分不明、おそらく無韻）

穀36：協国　色26：如字、若穀如字其(29)色協速　／　家37：協孤　辜38　／　徳27　福28：協偪(30)　徳 39　福 40：同じく協偪か　咎 41：協姑

（「六極」～「六曰弱」無韻）

福 77　威 78：古畏字、亦可協域与福食為韻　食 79　食 80　食 81　国 83　忒 85

上記の韻字を見ると、熊は「陂42　義43」という歌部の押韻や、真部・耕部の合韻による「偏50　平51」という押韻をすでに認識していたということがわかる。また、熊のように本文の順序を入れ替えたことで、「明31　行33　昌34」と「行62　光63　王66」という2箇所の陽部の押韻が一連の押韻となり、「徳27　福28」と「徳39　福40　咎41」という2箇所の之部（及び之部・幽部合韻）の押韻が一連の押韻となっている。但し、「徳27　福28」と押韻していた「色26」は切り離されて、「穀36」と押韻させられているが、「穀」は上古侯部の字である。熊はこの押韻を調和させる手段として、「穀」（中古通摂入声屋韻一等見母）字の音を「国」（中古曽摂入声徳韻合口見母）に変えるか、「色」（中古曽摂入声職韻開口審母二等）字の音を「速」（中古通摂入声屋韻一等心母）に変えるか決めかねている。「徳」・「福」と「咎」との押韻については、江も「之幽通韻」の例としてこの押韻を認めているが、熊が「咎」字に付けている音は「姑」（中古臻摂入声質韻開口群母三等）であって、熊によれば、-k韻尾の中古徳・職開口の音と-t韻尾の中古質韻開口の音が韻として調和すると見なされていることがわかる。また、熊の本文の改定によって、「徳68　直69　克70　克71　直72　克73　克74　克75　克76　福77　食80　食81　国83　忒 85」という一連の之部の押韻が「克76」と「福77」の間で2つに切り離される結果になっているが、熊は「福77」以下の押韻の中に「威78」（上古微部　中古止摂平声微韻合口影母）すなわち熊によれば「古畏字」（上古微部　中古止摂去声未韻合口影母）を含ませ、その音を「域」（中古曽摂入声職韻合口喩母三等）としている。

6．諧声文字

諧声系列は、先秦時代の韻文の押韻とならんで、古韻を研究する際の2大資料とされているが、

熊がこのような諧声文字の字音の資料価値を既に認識していたことは、前稿でも見たとおりである。諧声文字について言及した文章は、前稿で検討した「易詩書古韻」の条以外にもいくつか見え、特に（系列をなす）諧声文字の字音を論じたものもある。まず、熊は巻四の「保氏六書」の条で次のように述べて、諧声文字の造字の原理の根本が「（表）音」にあることを確認し、多くの合体字を会意的に解釈する宋の王安石の『字説』の学問を批判している。

「世間文字雖多、然玉篇諸部不過二万二千七百二十六字、夾漈六書略凡二万四千二百三十五字、於内諧声二万一千三百四十二字、是諧声居六書十分之九矣。漢字猶有有声而無字者、番字則皆諧声矣。王荊公字説、則字皆会意、無所謂六書。故王氏周礼新経、至六書無可説。」（世の中に文字は多いといっても、それでも『玉篇』の諸部の字を合わせて２２７２６字にすぎず、鄭樵の「六書略」が載せている文字が全部で２４２３５字で、そのうち諧声文字が２１３４２字であるから、諧声が六書の１０分の９を占めているわけである。漢字にはなお音のみあってそれを表記する文字がない場合があるが、異民族の文字はというとみな諧声でできている。王安石の『字説』は文字といえば皆会意文字という考え方で、これでは六書などというものは存在しないことになる。従って、王氏の著した『周礼新経』には、「六書」について何の解説もしていないのである。）

異民族が使用する表音文字に注目し、それを漢字と比較して、諧声という造字法に注目するのは、熊も引用している鄭樵が「六書略」や「七音略」（序）でさかんに述べていることであり、この時代にそういう１つの思想の流れがあったのかもしれない。巻七「評韻釈」の条にも次のような叙述があり、ほぼ同様の趣旨を述べている。

「六書中諧声最多、既由諧声則不論其義、毎字必強求其義、此荊舒之曲学、非六書之本法也。」（六書の中では諧声文字が最も数が多く、諧声文字であるからにはその［声符の］意味をうんぬんする必要はないのである。それなのに字ごとにむりにその意味を求めるのは、蛮地の曲学であって、六書の本来の法にはかなっていない。）

次に、熊が、巻七「評篆」の条と、同「評韻釈」の条で、諧声文字或いは諧声系列の音について取り上げている部分を見てみたい。熊の原文を逐一引用するよりも、熊の取り上げている諧声の例とそれに伴う主張を順序立てて見て行くこととする。

まず、熊はいくつかの諧声字の字音について、その声母を問題にしている。その例は２つある。

（１）「博」字が「尃」を音符とすることについて。

熊は、「博」字の「尃」の部分を意符ではなく声符と考えているが、しかし「博」字は幫母（上古魚部　中古宕摂入声鐸韻幫母）で、「尃」字は敷母（上古魚部　中古遇摂平声虞韻敷母）であるから、おそらく「博」字は「溥省声」であるのが正しいだろうと言う。「博」と「溥」（上古魚部　中古遇摂上声姥韻滂母・宕摂入声鐸韻幫母）なら音が近く、「縛」（上古魚部　中古宕摂入声薬韻奉母）字こそ確かに「尃」の諧声文字であろうが、「博」はそうではないというのが熊の主張である。

これは明らかに、熊が上古音の段階では重唇音と軽唇音の区別がなかったことを知らなかった

ためになされた議論であると思われる。

（2）「路」字が「各」を音符とすることについて。

これは後世、上古音に kl-のような複声母の存在を想定するきっかけとなる諧声例の1つであるが、熊も「路」字（上古魚部　中古遇摂去声暮韻来母）が来母で、「各」（上古魚部　中古宕摂入声鐸韻開口見母）が見母であることを問題にしている。しかし熊は、李陽冰が「路」の「各」を「輅」（上古魚部　中古遇摂去声暮韻来母）の省略とする説をしりぞけ、「各」はやはり声符であるとして、その他の見母と来母とが関連する諧声や字音の例を挙げている。熊のあげる例は次のとおりである。

「洛」字（上古魚部　中古宕摂入声鐸韻開口来母）。この字も「各」の諧声文字である。熊によればこの字音は「路」の去声音にあたるという。

「虍落」を「虍路」と書くことがあること(31)。「落」（上古魚部　中古宕摂入声鐸韻開口来母）は「洛」の諧声文字である。

「谷」（上古屋部　中古通摂入声屋韻一等見母・同一等来母・同喩母四等）字に「禄」（中古通摂入声屋韻来母）の読音があること。

「角」（上古屋部　中古江摂入声覚韻見母・通摂入声屋韻来母）字に「禄」の読音があること。

熊はこれらの例を挙げ、「諧声を論じるには古音を論じなければならない」とし、「路」が「各」の諧声であるのもこれらの例のうちの1つであると結論している。すると、熊は「古音」の声母には後の字音の声母によって律しきれない部分があったことを認めているとも考えられる。

熊がこの諧声例を取り上げたのは、これが宋の徐鍇の『説文解字繫伝』巻三十六「袪妄」篇において論じられていることによる。熊は『繫伝』を見ており、熊が引く李陽冰の説も『繫伝』が引用しているものである。徐鍇は、「路」が「従足輅省」とする李の説を採らず、やはり「路」は「各」の諧声文字である可能性を認めているようであるが、「路」と「各」の音の差異については、「臣鍇以為、古之音字或与今殊、蓋亦不甚切。」（思うに、古の文字における発音の表わしかたは今とは違っていたようである。またおそらく十分に厳密ではなかったようだ。）と述べているのみである。このように、たんに「不甚切」等とするのみの徐鍇よりも、熊の理解のほうが何歩も進んでいることは明らかである。

また、陰声韻と入声韻にわたる諧声系列も1例取り上げられている。すなわち、

由（上古幽部　中古流摂平声尤韻喩母四等）

：抽（中古流摂平声尤韻徹母）・紬（中古流摂平声尤韻澄母）・油（中古流摂平声尤韻喩母四等・去声宥韻喩母四等）：以上「諧其平声」

：宙（中古流摂去声宥韻澄母）・冑（中古流摂去声宥韻澄母）・袖（中古流摂去声宥韻邪母）・柚(32)（中古流摂去声宥韻喩母四等・通摂入声屋韻澄母）：以上「諧其去声」

：軸（中古通摂入声屋韻澄母）（：「諧宙省」）・迪（中古梗摂入声錫韻開口定母）・笛（中

古梗摂入声錫韻開口定母）・頤(33)（中古梗摂入声錫韻開口定母）：以上「諧其入声」

熊がこれを取り上げたのは、『説文解字繫伝』の巻三十九「疑義」篇で、『説文』に「油」・「宙」・「軸」などの（「由」の諧声文字と見られる）文字があるにもかかわらず「由」字が載っていないことについて、「由」字が誤脱であるのかどうかが論じられていることがきっかけになっている。熊がこれらの諧声文字について、「可以宙軸推之。」（「宙」字と「軸」字から推し量ることができる。）と述べたり、「軸」字について「軸諧宙省。」（「軸」は「宙」の省声に調和している。）と述べていることから、熊は或いは「由」字を補うことなく、『説文』に出ている文字の範囲で諧声系列を考えようとしたのかもしれないが、その場合でも、「軸」が「宙」の諧声文字であることを介して、陰声韻の中古尤韻の系列と入声韻の中古屋韻・錫韻とがつながりを持つわけである。熊はとくに錫韻との関係に注目しており、傍証として、先に本稿２（４）ですでに見たところの、『詩経』「南有嘉魚」・「賓之初筵」で「又」（上古之部　中古流摂去声宥韻喩母三等）が熊によれば「夷益切」（梗摂入声昔韻開口喩母四等）の音で「識」字（上古之部　中古曽摂入声職韻開口審母三等）や「来」字（朱熹によれば「叶六直切」［中古曽摂入声職韻開口来母］）と押韻している現象を引いている。これは「由」の諧声系列とは韻部が違うけれども、中古音の同じような韻が関連しており、熊にとっては同一の現象だととらえられたのであろう。熊はこの現象を、「此由又四声之通例也。」（これらの「由」・「又」字をめぐる現象は四声によって音が調和する通例である。）と結論づけ、「為儒而不通古音、不可以読易詩書、亦不可与談字学也。」（学者でありながら古音に通暁していないようでは、『易経』や『詩経』や『書経』を読むこともできないし、ともに文字の学を論じることもできない。）としめくくっている。

もう１つ、諧声の関係を考える際に音を問題にしているものに、「毐」・「毒」・「纛」の諧声系列がある。

毐（上古之部　中古蟹摂上声海韻影母）

（熊）「烏代切」（中古蟹摂去声代韻影母）・「徒酷切」（中古通摂入声沃韻定母）

：毒（上古覚部　中古通摂入声沃韻定母）・纛（上古覚部　中古效摂去声号韻定母・通摂入声沃韻定母）

この例も『説文解字繫伝』（巻三十六）に触発されたもので、「毐」に「烏代反」（『広韻』の音と声調が異なる。）と「毒」（すなわち「徒酷切」に同じ。）の２音があって、「毒」字の声符が「毐」であることはもともと徐鍇が主張していることである。徐は「毐」字が音「毒」に読まれる例が顔師古の『漢書注』に見えると言っており、熊もそれを踏襲しているが、管見のところでは顔師古にこの音注は見つからなかった。熊は「毐」に「烏代切」と「徒酷切」の２音があるゆえに、「纛」とも「毒」とも諧声の関係になれるのだと述べているが、或いは「毐」の蟹摂一等代韻の音が「纛」の效摂一等号韻の音と調和しやすいと考えているのかもしれない。

その他、「評篆」や「評韻釈」の条の中で、熊が「某字の音符は某である」と明示しているものを取り集めてみると次のようなものがある。熊はこれらの諧声関係を認めているということであり、それはすなわち音的にも調和すると見なしているということになろう。

（1）（声符［以下略す］）弋（上古之部　中古曽摂入声職韻開口喩母四等［以下「上古」・「中古」略す。］）：（諧声文字［以下略す］）式（脂部　臻摂入声質韻開口影母四等）

（2）亡（陽部　宕摂平声陽韻微母）：長（陽部　宕摂平声陽韻開口澄母・同上声知母・同去声澄母）

（3）酉（＝「卯」）（幽部　流摂上声有韻喩母四等）：劉（幽部　流摂平声尤韻来母）

（4）酉（＝「卯」）：駲（幽部　流摂平声尤韻来母）

（5）屯（文部　臻摂平声魂韻定母・同諄韻知母）：春（文部　臻摂平声諄韻穿母三等）

（6）龜（宵部　效摂平声宵韻精母）：秋（幽部　流摂平声尤韻清母）

（7）夂(34)（＝終）（冬部　通摂平声東韻照母三等）：冬（冬部　通摂平声冬韻端母）

（8）公（東部　通摂平声東韻見母一等）：衮（文部　臻摂上声混韻見母）

（9）戸（魚部　遇摂上古姥韻匣母）：妒（魚部　遇摂去声暮韻端母）(35)

（10）野（魚部　仮摂上声馬韻開口喩母四等・遇摂上声語韻禅母三等）：墅（遇摂上声語韻禅母三等）(36)

（11）見（元部　山摂去声霰韻開口見母・匣母）：莧（元部　山摂去声襇韻開口匣母）

（12）矢（脂部　止摂上声旨韻開口審母三等）：知（支部　止摂平声支韻開口知母）

（13）壮（陽部　宕摂去声漾韻開口照母二等）：荘（陽部　宕摂平声陽韻開口照母二等）

（14）光（陽部　宕摂平声唐韻合口見母・同去声）：觥（陽部　梗摂平声庚韻合口見母）

（15）才（之部　蟹摂平声咍韻従母）：豺（之部　蟹摂平声皆韻開口床母二等）

（16）良（陽部　宕摂平声陽韻開口来母）：狼（陽部　宕摂平声唐韻開口来母）

（17）羊（支部　止摂上声紙韻明母四等）：美（脂部　止摂上声旨韻明母三等）

（18）酉（＝卣）（幽部　流摂上声有韻喩母四等）：酒（幽部　流摂上声有韻精母）

7．『詩経』の異文

熊は、『熊氏経説』巻六「礼記引詩」の条で、『礼記』に見える『詩経』の引用が、『詩経』自身の本文と文字遣いが異なっている現象を取り上げている。その食い違いの原因について、熊は、もともと詩の歌詞の表記はその音を写し留めるのが本来のやりかたで、従って字義にかからわず多く仮借が行われたからだと考えているようである。すなわち、

「古人嘗歌詩、故引詩者但記其音、不論字義。」（古人はかつて『詩経』の詩を歌として歌っていたから、『詩経』を引用する者はその音を記し、字義にこだわらなかった。）そして、『礼記』に

見える『詩経』の詩篇の引用に、『詩経』本文と字遣いが異なっている例が多くあることからも、「可見古人以歌詩為常、記其字音足矣、非若経生博士区区於訓詁也。」（古人の習慣では『詩経』は歌われるものであって、その字音を記せば十分だったのであり、後の経書を学ぶ学生や博士たちのようにこせこせと訓詁にこだわったりしなかったということが見て取れる。）のだという。そして、その異文の例の中には、『詩経』の学者によって誤って伝えられ、『礼記』の表記に拠らなければ正しい字音と字義が得られないものもある、と述べている。すなわち、「豈可謂礼記引詩訛其字音、如関雎之好仇、文王有声匪革其猶、仮楽之嘉楽、皆訛於詩家、不若礼記為得其字音義之正也。」（『礼記』が『詩経』を引用する際にその字音を誤っているとは言えない。たとえば、「関雎」の「好仇」や、「文王有声」の「匪革其猶」や「仮楽」の「嘉楽」などは、みな後の『詩経』の研究家たちが誤ってしまったものであって、『礼記』のほうがむしろその字音や字義の正しい姿を伝えているのである。）

以下に、熊がこの条で取り上げている『礼記』に見える『詩経』の異文の例を、列挙しておく。上の熊の言葉からして、これらの例も熊にとって古音を考える資料の１つであったにちがいない。なお熊は『春秋左氏伝』に見える同様の例も２例あわせて挙げている。これらは、『礼記』にみられるような引用のしかたが『礼記』だけの特別な体例ではなく、当時の『詩経』の詩句の一般的な表記のしかたにすぎないことを証拠立てるために引かれたものらしい。

熊が「字雖異而音本同。」（文字は異なっていても音はもともと同じである。）とするもの

（１）『詩経』大雅249仮楽１章「仮楽君子、顯顯令徳」　『礼記』中庸「嘉楽君子、憲憲令徳」
（以下『詩経』・『礼記』は略す。）
仮（上古魚部　中古『集韻』仮摂去声禡韻開口匣母［以下「上古」・「中古」略す。］）：嘉（歌部　仮摂平声麻韻見母二等）
顯（元部　山摂上声銑韻開口暁母）：憲（元部　山摂去声願韻開口暁母）

（２）衛風55淇奥１章「緑竹猗猗、有匪君子」　大学「箓竹猗猗、有斐君子」
緑（侯部　通摂入声燭韻来母）：箓（侯部　通摂入声燭韻来母）
匪（微部　止摂上声尾韻非母）：斐（微部　止摂上声尾韻敷母）

（３）大雅262江漢６章「矢其文徳、洽此四国」　間居「弛其文徳、協此四国」
矢（脂部　止摂上声旨韻開口審母三等）：弛（歌部　止摂上声紙韻開口審母三等）
洽（緝部　咸摂入声洽韻匣母）：協（葉部　咸摂入声怗韻匣母）

（４）周南1関雎１章「君子好逑」　緇衣「君子好仇」
逑（幽部　流摂平声尤韻群母）：仇（幽部　流摂平声尤韻群母）

（５）大雅244文王有声３章「匪棘其欲」　礼器「匪革其猶」
棘（之部　曽摂入声職韻開口見母）：革（之部　梗摂入声麦韻開口見母）
欲（侯部　通摂入声燭韻喩母四等）：猶（幽部　流摂平声尤韻喩母四等）

（6）曹風151候人２章「彼其之子」　表記「彼記之子」

其（之部　『集韻』止摂去声志韻見母三等）：記（之部　止摂去声志韻見母三等）

（7）小雅228隰桑４章「遐不謂矣」　表記「瑕不謂矣」

遐（魚部　仮摂平声麻韻開口匣母）：瑕（魚部　仮摂平声麻韻開口匣母）

（8）小雅164常棣７章「和楽且湛」　中庸「和楽且耽」

湛（侵部　咸摂平声覃韻端母）：耽（侵部　咸摂平声覃韻端母）

（9）大雅259崧高１章「崧高維嶽」　孔子間居「嵩高維(37)嶽」

崧（東部　通摂平声東韻心母四等）：嵩（冬部　通摂平声東韻心母四等）

（１０）大雅245生民８章「后稷肇祀」　表記「后稷兆祀」

肇（宵部　效摂上声小韻澄母）：兆（宵部　效摂上声小韻澄母）

熊が「字音可以相通者」（字音が互いに通じあえるもの）とするもの

（１１）邶風35谷風３章「我躬不閱」　表記「我今不閱」

躬（冬部　通摂平声東韻見母三等）：今（侵部　深摂平声侵韻見母三等）

（１２）小雅192正月１１章「亦孔之炤」　中庸「亦孔之昭」

炤（宵部　『集韻』效摂平声宵韻照母三等）：昭（宵部　效摂平声宵韻照母三等）

（１３）衛風58氓２章「体無咎言」　坊記「履無咎言」

体（脂部　蟹摂上声薺韻開口透母）：履（脂部　止摂上声旨韻開口来母）

（１４）大雅241皇矣４章「貊其徳音」　楽記「莫其徳音」

貊（魚部　梗摂入声陌韻明母二等）：莫（魚部　宕摂入声鐸韻明母）

（１５）大雅256抑２章「有覚徳行」　緇衣「有梏徳行」

覚（幽部　江摂入声覚韻見母）：梏（幽部　通摂入声沃韻見母）

（１６）大雅244文王有声７章「宅是鎬京」　坊記「度是鎬京」

宅（魚部　梗摂入声陌韻開口澄母二等）：度（魚部　宕摂入声鐸韻開口定母）

『春秋左氏伝』の引『詩』例

（１７）『詩経』小雅192正月１２章「洽比其隣」　『春秋左氏伝』僖公２２年伝・襄公２９年伝「協比其隣」（以下書名略す。）

洽（緝部　咸摂入声洽韻匣母）：協（葉部　咸摂入声怗韻匣母）

（１８）小雅222采菽４章「平平左右」　襄公１１年伝「便蕃左右」

平（耕部　梗摂平声庚韻並母三等・山摂平声仙韻並母四等）：便（元部　山摂平声仙韻並母四等・同去声線韻並母四等）・蕃（元部　山摂平声元韻奉母・同非母）

8．おわりに

前稿でも見たことであるが、『熊氏経説』の中で熊朋来は、宋の鄭庠が中古音で韻尾を同じくする韻どうしの範囲で古韻を6部に分けているのを批判し、その枠を逸脱するような、或いはもっと細かい部分けに基づく古音の推定が必要であるような、押韻現象を取り上げて論じている。その中には先秦時代の押韻の状況を正しくとらえ、学史上評価できるような点に着眼しているものもある。上古音では同じ韻部に属していた韻どうしの関連がいくつか見いだされ、押韻や諧声系列の観察を通じて入声韻と陰声韻の関連の深さにも注意が及んだ。また、諧声系列をその声母に注目して論じるなどは、導き出された結論には必ずしも正しくないものも含まれるが、優れた視点だと言ってよい。しかし後の清朝時代の学者たち、たとえば江有誥等になると最早押韻があるとはみなされなくなるようなゆるやかな押韻字の認め方をし、いささか融通無碍に過ぎると感じさせる例も混じっている。上古東部の「功」字が『詩経』の「魯頌」で「古」の音によって「野」等魚部の諸字と、『書経』の「大禹謨」では「刮」の音によって「伐」（月部）と押韻しているとみなすなどはそのきわだった例である。またたとえば中古音で-m・-n・-ng韻尾を持つ、深摂と、（魂韻を除く？）臻摂の諸韻、曽摂の諸韻、梗摂のうちの開口細音の音などは、熊によれば互いに押韻が可能であるとみなされているようである。しかしそれらのうち、「功」に「古」の叶音を認めることや、上記のような異韻尾の諸韻の通韻などは、先行の朱熹や呉棫の著書に同様の解釈があらわれている。総じて、熊の説を朱や呉、またその後を承ける陳第の説と比較すると、そのどれかと一致するものも多く、とりわけ具体的な個々の押韻例や韻字の音の推定に関しては、やはり鄭庠・呉棫・朱熹の後を承け陳第に到る古韻学史の大きな流れの中間に熊も位置するということができよう。のち、熊の提示した『書経』の押韻の解釈や、「功」と「伐」の押韻の是非についてなどは、清代の毛奇齢や周春によって引用され批判されているわけだが、毛は顧炎武らの音韻学を理解しなかったことで後の批判にさらされているし、彼らはいずれにしろ清朝音韻学の主流をなす学者たちとは認められていない人々である。

清朝小学に到る前の、宋・元・明代の古韻研究史を論じる際、従来は鄭庠の『古音辨』・呉棫の『韻補』・陳第の『毛詩古音考』・『屈宋古音義』など音韻に関する専著の内容に沿って跡づけられることが多かったと思われる。しかし今回熊朋来の『熊氏経説』を古韻に関する言説に注目してひもといてみたことにより、このような経義に関する著述類にも、その時代の音韻学や古韻学のありさまを伺い知るよすがとなるべきものがまだあるのではないかと考えるようになった。その内容が学史上どの程度に評価できるかはまた別の問題である。それに筆者は今回全く偶然の機会に清の周春の『十三経音略』に熊の説が引かれているのを発見したのであるが、このことから、彼らの経書の字音に関する解説というものが清朝時代の経学の一部にまだ影響を及ぼしていたことが知られるのではなかろうか。

『熊氏経説』の中には後漢ころの経書の注釈に見られる音注のありかたを論じた部分（巻四「漢

儒於礼経輒改某字読作某音」の条）や、韻書の字音の採用のしかたを批評した部分（巻七「評韻釈」の条）なども存在しており、熊朋来の音韻観を見るにあたって見逃すことのできないものであろうと思われるが、狭い意味での古韻とやや時代がずれることもあり、それらの部分の検討は次の機会にゆずることとする。

注

(1)『詩経』の詩篇には、『詩経』全体を通じた通し番号を付しておく。たとえばここでは「斯干」が『詩経』の１８９番目の詩であることを示す。

(2)本稿では、詩文の押韻例を引用する際は、原則として、その押韻字だけを示す。たとえば、「庭1」は、この章の第１句目の韻字が「庭」であることを示す。

(3)本稿４「『書経』の押韻」p.8 参照。

(4)本稿では個別の文字の上古音・中古音を求めるための参考書としては主として『漢字古音手冊』を用いたが、同書は王力『漢語史稿』の説に基づいており、従って上古音の入声は独立した韻部をなしている。しかし、本稿で所属韻部を示す際には、詩文の韻字を求める際に参照している江有誥の説にならって、陰声・入声を同じ韻部とする分部のしかたに従った。以下これにならう。

(5)ここで「猗1-1」・「那1-3」のように表記しているのは、句中韻がある場合である。すなわち、句末字やそれに準じる文字が互いに押韻しているのではなく、たとえばここでは第１句の第１字目の「猗」字と第１句第３字目の「那」とが押韻に参加していることを示す。

(6)一般に「漸」の一番上の爻は陽爻とされ「上九」と呼ばれているが、熊のこの条では『通志堂経解』本・『四庫全書』本とも「上六」とされている。原因は不明。

(7)顧炎武は『日知録』や「易本音」（『音学五書』所収）で、この説は宋の范諤昌から出ていると言っている。

(8)胡瑗述・倪天隠述『周易口義』巻九。以下この問題をめぐる研究史については本田氏書・鈴木氏書の教示に従う。

(9)『易程伝』巻六

(10)『周易本義』巻二「胡氏程氏皆云、陸当作逵、謂雲路也。今以韻読之良是。」

(11)江永『群経補義』「周易」（『皇清経解』巻二百五十六）

(12)『四庫全書』本に従う。『通志堂経解』本は「友」に作る。

(13)句の切り方は、鈴木由次郎氏『全釈漢文大系１０　易経　下』に従った。ただし、切れ目の表示はすべて読点に統一した。

(14)「字」は『通志堂経解』本・『四庫全書』本ともに「孚」に作っているが、文脈から判断し

て「字」の誤りではないかと考えられるので、このように改めた。

(15)「治」は『通志堂経解』本は「冶」に作る。ここでは『四庫全書』本に従う。

(16)「已」は『通志堂経解』本では「巳」のように判読できて、明瞭ではない。ここでは『四庫全書』本に従った。「久」が中古見母字であることを考え合わせると、ともに「己」(中古止韻見母)の誤刻かもしれない。

(17)この部分、『通志堂経解』本・『四庫全書』本ともに『易』本文は「小過過也」となっているのに、注では『通志堂経解』本は「故遇、新信互韻。」と記しており、『四庫全書』本は不明瞭だが「故遇」のようにも読める。「小過過也」句の韻字が「遇」であれば、文脈の上からも音の上からも熊の見解としてふさわしいと思われる。熊は或いは「過也」の部分を「遇也」とするような本文を採っていて、それが『熊氏経説』を刻印する際に乱されてしまったものかもしれないが、なお未詳である。

(18)前稿でも指摘したことだが、熊は韻目の表示などで「真」(韻)とあるべきところを「貞」と記していることが多い。ここは、『通志堂経解』本・『四庫全書』本ともに「貞」であるが、この条(「襍卦錯簡」)前半の「雑卦伝」の押韻状況を説明した部分で、「正読為真、与顛協」と述べていることから、この音注「貞」は「真」とあるべきところではないかと考えて、このように記載した。

(19)明・胡広等撰『周易伝義大全』巻二十四「鄭氏康成曰、自大過以下卦旨不協、似錯乱失正、弗敢改耳。」『古経解彙函』本の『鄭氏周易注』(巻下)では「卦旨」は「卦音」に作られている。以下、「雑卦伝」の錯簡をめぐる研究史については本田氏書・鈴木氏書の教示に従う。

(20)『蘇氏易伝』巻之九

(21)『四庫全書珍本初集』所収の『周易経伝訓解』は「雑卦伝」に関する部分を欠いている。『周易伝義大全』巻二十四「節斎蔡氏曰、按雑卦例皆反対協韻為序、今以其例改正、大過顛也、……。」

(22)『周易伝義大全』巻二十四「建安丘氏曰、今依蔡易読之、則八卦既得以類従、而韻亦協、但不当僭改経文爾。」

(23)『易纂言』「雑卦伝第十」。

(24)『古周易訂詁』巻十六「依蔡氏所定、卦既対、韻亦協、呉草廬従之、似不可易。」

(25)『周易本義』巻四「自大過以下卦不反対、或疑其錯簡、今以韻協之、又似非誤、未詳何義。」

(26)句の切り方は、池田末利氏『全釈漢文大系１１　尚書』に従った。ただし、切れ目の表示はすべて読点に統一した。

(27)熊の本文では、62「是訓是行」の前半２字「是訓」が消えてしまっている。

(28)「光」を『通志堂経解』本は「先」のように作る。ここでは『四庫全書』本に従う。

(29)『四庫全書』本に従う。『通志堂経解』本は「具」に作る。

(30)『四庫全書』本に従う。『通志堂経解』本は「福」に作る。

(31)「虍」は「虎」の古字。「虎落」は城や砦を覆う割竹を連ねた竹矢来。『漢書』巻四十九「鼂

錯伝」等は「虎落」に作り、『文選』巻四、揚雄「羽猟賦」は「虎路」に作る（李善注は晋灼を引いて「路、音落」とする）。

(32)「柚」を『通志堂経解』本は「抽」に作る。『四庫全書』本は不明瞭だが「抽」のように作っている。ここでは字音の面から、「柚」字の誤りではないかと判断した。

(33)『通志堂経解』本・『四庫全書』本とも、「由」の諧声文字の例を挙げる部分では「頤」に作るが、これが「入声」に調和（「諧」）していると説明する部分では「暝」のように作っている。「頤」のほうが正しいと思われる。

(34)『通志堂経解』本・『四庫全書』本とも「冬」の諧声符が「文」であると記しているが、これは「冬」字の上の部分、すなわち「終」の原字を示したものだと考えられる。続く部分で「終諧其声也。」と述べてもいる。

(35)熊は「妒」の異体「妬」の「石」は「戸」の形がくずれたものだと述べている。しかし「石」は上古魚部で「妒」と同韻部である。

(36)熊は、（この諧声関係を疑うのは）、「不思上与切者野之正音、以者切非正音。」（「上与切」が「野」字の正音で、「以者切」は正音ではないことを考えないものである。）と言っている。

(37)熊によれば『礼記』の引用文は「嵩高維嶽」であるが、『十三経注疏』本の『礼記』では「嵩高惟嶽」になっている。

文献目録

『熊氏経説』（元）熊朋来撰　通志堂経解（台湾・大通書局拠康熙19年刻本影印、1969中文出版社刊）所収

『五経説』（元）熊朋来撰　四庫全書経部五経総義類所収

『説文解字繫伝』（南唐）徐鍇撰　1987 中華書局（拠道光十九年祁寯藻刻本影印）

『宋本韻補』（宋）呉棫撰　1987 中華書局（拠遼寧図書館蔵宋刻本影印刊）

『詩集伝』（宋）朱熹撰　1961中華書局香港分局

『毛詩古音考』（明）陳第撰　康瑞琮点校　1988 中華書局

『音学五書』（清）顧炎武撰　音韻学叢書（1987台湾・広文書局刊、以下同）所収

『日知録集釈（外七種）』（清）顧炎武撰、（清）黄汝成集釈　1985 上海古籍出版社（拠清道光十四年嘉定黄氏西谿草廬重刊定本影印）

『古今通韻』（清）毛奇齢撰　四庫全書珍本十集所収

『群経補義』（清）江永撰　皇清経解所収

『十三経音略』（清）周春撰　叢書集成初編所収

『江氏音学十書』（清）江有誥撰　音韻学叢書所収

『宋本広韻』（宋）陳彭年等撰　1976台湾・芸文印書館（拠張氏沢堂本影印）

『宋刻集韻』（宋）丁度等撰　1989中華書局（拠北京図書館蔵宋刻本影印）
『漢字古音手冊』郭錫良編　1986北京大学出版社
『全釈漢文大系１０　易経　下』鈴木由次郎著　1974 集英社
『全釈漢文大系１１　尚書』池田末利著　1976 集英社
『中国古典選１　易（上）』・『中国古典選２　易（下）』本田済著　1978 朝日新聞社
『鄭氏周易注』（宋）王応麟撰集、（清）恵棟増補、（清）孫堂重校　古経解彙函（1998 中文出版社刊『古経解彙函・小学彙函・附十種』）所収
『周易口義』（宋）胡瑗述、（宋）倪天隠述　四庫全書珍本三集所収
『蘇氏易伝』（宋）蘇軾撰　百部叢書集成『学津討原』所収
『易程伝』（宋）程頤伝　古逸叢書（1990江蘇広陵古籍刻印社影印刊）所収
『周易本義』（宋）朱熹撰　四庫全書珍本六集所収
『周易経伝訓解』（宋）蔡淵撰　四庫全書珍本初集所収
『易纂言』（元）呉澄撰　通志堂経解所収
『周易伝義大全』（明）胡広等撰　四庫全書珍本十集所収
『古周易訂詁』（明）何楷撰　中国書店影印刊
『十三経注疏』（清）阮元校刻本影印、黄侃句読　1990上海古籍出版社
『漢書補注』（漢）班固・（清）王先謙撰　1996 台湾・芸文印書館
「呉棫所分古韻考」頼江基著『暨南学報　哲学社会科学』1986 年第 3 期
「朱熹反切考」王力著『竜虫並雕斎文集（第三冊）』（1982 中華書局）

（山口大学人文学部助教授）